

トカラの各島で教育体験をする院生たち



梶田 毅一

(兵庫教育大学長)

トカラの島々での教育体験プロジェクト

夏休み明けの九月、兵庫教育大学の大学院生九人がトカラ列島の有人七島の小中学校に分担して赴き、各自一週間程度、それぞれの学校で教育活動に参画させてもらうことになっている。トカラ列島は、鹿児島県の薩南諸島に属し、行政的には十島村である。屋久島と奄美大島の間に位置し、黒潮に洗われる温暖な気候で亜熱帯植物の宝庫という。ただし、島から島への移動手段は村営の定期船のみであり、天候が悪化して欠航すれば、少なくとも数日間、島は孤立状態になる。いずれにせよ、院生諸君は、強烈な日差しの中で、現地の子どもたちと一緒に勉強したり遊んだりしてやることであろう。また現地で様々な調査を行い、校長先生や教員の方々、さらには教育委員会をはじめ、バックアップして下さる方々から、数多くのことを学んで帰ることになるであろう。

兵庫教育大学は、三〇年近く前に新構想大学として新たに設立された大学である(続いて上越教育大学、鳴門教育大学が設立された)。「優れた教員の養成と研修」を使命とする個性的な大学であり、学部には約七〇〇人、大

学院修士課程に同じく約七〇〇人が在籍し、また兵庫教育大学を中心とする四大学で構成される連合大学院博士課程に約一〇〇人の院生を擁している。修士課程の院生の約四割二七〇人は現職の教員であり、また博士課程の在籍者にも現職の教員が多い。さらには、学部卒業者の教員採用率は八割を超え、毎年全国の大学の中でトップレベルの実績を持っている。まさに教育一色の大学であるといっている。

今回のトカラ・プロジェクトのリーダーのN君も、三重県から派遣されて二年間修士課程で研究する三八歳の現職教員(県立高校の地歴公民担当の教師)である。そして他の八人(女子二名・男子六名)は、教職を目指すストレート・マスター(多様な大学を卒業後、本学の修士課程に進学)である。自分自身が受けてきた学校教育が都市部のものであり、また将来においても都市部の学校の教壇に立つ可能性が高いとして、離島という僻地で少人数教育の実情を体験しようというのが主目的であり、これに合わせて、トカラの無垢に近い大自然の中で子どもたちと心の交流をしたい、という強い思いもあるという。

リーダーのN君は、昨年八月、トカラ列島の中之島に赴いて中之島小中学校を訪ね、校長や教員の方に学校内外を案内してもらおうと共に、現地での教育のあり方について数多くの御教示を頂いている。また、帰途、鹿児島市にある十島村役場を訪ね、教育委員会事務局と企画観光課の方々から、丁寧な説明と多量の資料を頂いてきている。こうした体験と資料に基づき、N君の呼びかけに集まった総員九人の院生によって昨年一〇月にトカラ研究会が立ち上げられ、週一回のペースで会合を持ち、メンバーが順に、トカラ列島について、あるいは離島の教育、僻地教育について発表し、話し合ってきたという。

離島で何を体験実習するのか

一つの島に一つの小中学校しかないので、口之島小中学校と平島小中学校には二人連れで赴くが、他の中之島小中学校、平島小中学校諏訪之瀬島分校、悪石島小中学校、宝島小中学校子宝島分校、宝島小中学校の五校には、

それぞれ一人で赴くことになる。民家に泊まり、現地校での授業にも可能な限り参加させてもらう（九人の院生全員が教員免許を既に持っている）。特に全専校での教育活動、体育や総合的な学習、自分の教員免許に関係した教科の授業には参加したい旨、予め現地校の校長先生らに依頼してあるという。

また校内の清掃や雑務にも積極的に参加し、給食を共にし、児童生徒から島の生活について話を聞きたいという。さらには、島の地形や植生、産物等を調査し、島の伝統的な食事の食材を調べ、釣りも試み、牧場などがある島ではその見物もお願いし、と盛り沢山の予定が組まれている。島の「観光マップ」の作成に意欲を燃やす院生もいる。

こうしたトカラ列島での教育体験については、一月の学園祭の際に学内報告会と資料展示会が持たれることになっている。またこの学園祭では、宝島のNPO法人「トカラ・インターフェイス」との連携によって、トカラ列島の食材を用いた模擬店の出店も予定されているという。

大学としてどう関わるか

大学として、このような特異な性格を持つプロジェクトにどう関わるかについては、学生委員会の委員の諸氏、そして事務局の学生支援課の諸氏も苦慮した点がないわけではない。このプロジェクトをスムーズに、また実効性を持つ形で実施するには、大学としてのバックアップがあったほうがよいことは確かである。しかし問題は、どこまでこのプロジェクトに大学として責任が持てるのか、という点である。

こうした議論の過程で、「大学としては一切関わりを持たないほうがよい」という意見もなかったわけではない。あくまでも院生有志が個人の責任で活動するものであって、そこに大学の研究教育活動との必然的な関係は見出し難い。従って誤解を生まぬようにこのグルーブの名称「兵庫教育大学トカラ研究会」から大学名も外してもらったほうがよい、という考え方である。これもまた一理ある意見といっている。しかし、我々は最終的にこのグ

ループの今回のトカラ・プロジェクトをできるだけバックアップしよう、という結論となった。理由は簡単である。このプロジェクトの趣旨も内容も、兵庫教育大学の使命とする「優れた教員の養成と研修」に直結するものであり、院生達が自発的自主的にこうした活動を行うということの意義は極めて大きいという認識に立ち、そうした学生諸活動は積極的に支援助成するのが大学としての責務である、と考えたからである。

こうした考え方に立って、特に学生委員長のN教授（学長特別補佐）と学生支援課のT主査が中心となり、リーダーのN君をはじめトカラ・プロジェクトのメンバー諸君に対して様々な助言と支援を行ってきた。主なものは以下の通りである。

- (一) 学長名で大学から十島村教育長への依頼状を発送。
- (二) 現地滞在中の危機対応（病気や怪我の際の具体的対応策・荒天により滞在延長を余儀なくされた場合の対応策等）についての計画書を大学に提出。
- (三) 傷害保険・賠償保険等への加入。
- (四) 現地滞在中における各メンバーとT主査との間の連絡体制の確保。

私自身、このトカラ・プロジェクトのメンバー全員と学長室で懇談の機会を持ち、今回の離島での教育体験という企画に非常に心打たれた。「最近の若者は……」という形で、学生達の生活態度の安易さ、日常性への埋没と目先のものだけへの関心、意欲と冒険心の欠如、等々が指摘されている現在である。トカラの離島で、基本的に分散しつつ相互に連携して、自分達の将来の教職生活において極めて意義ある体験を、計画的かつ能動的にやってみようという話は、聞くだけでも嬉しくなることである。特に、小・中・高校の教師に対して、社会体験の欠如からくる視野の狭さと独善性を指摘する声の強い昨今であるだけに、兵庫教育大学の使命とするところからいっても、大きく歓迎し、期待したいプロジェクトである。秋の学園祭での成果発表が待たれるところである。